

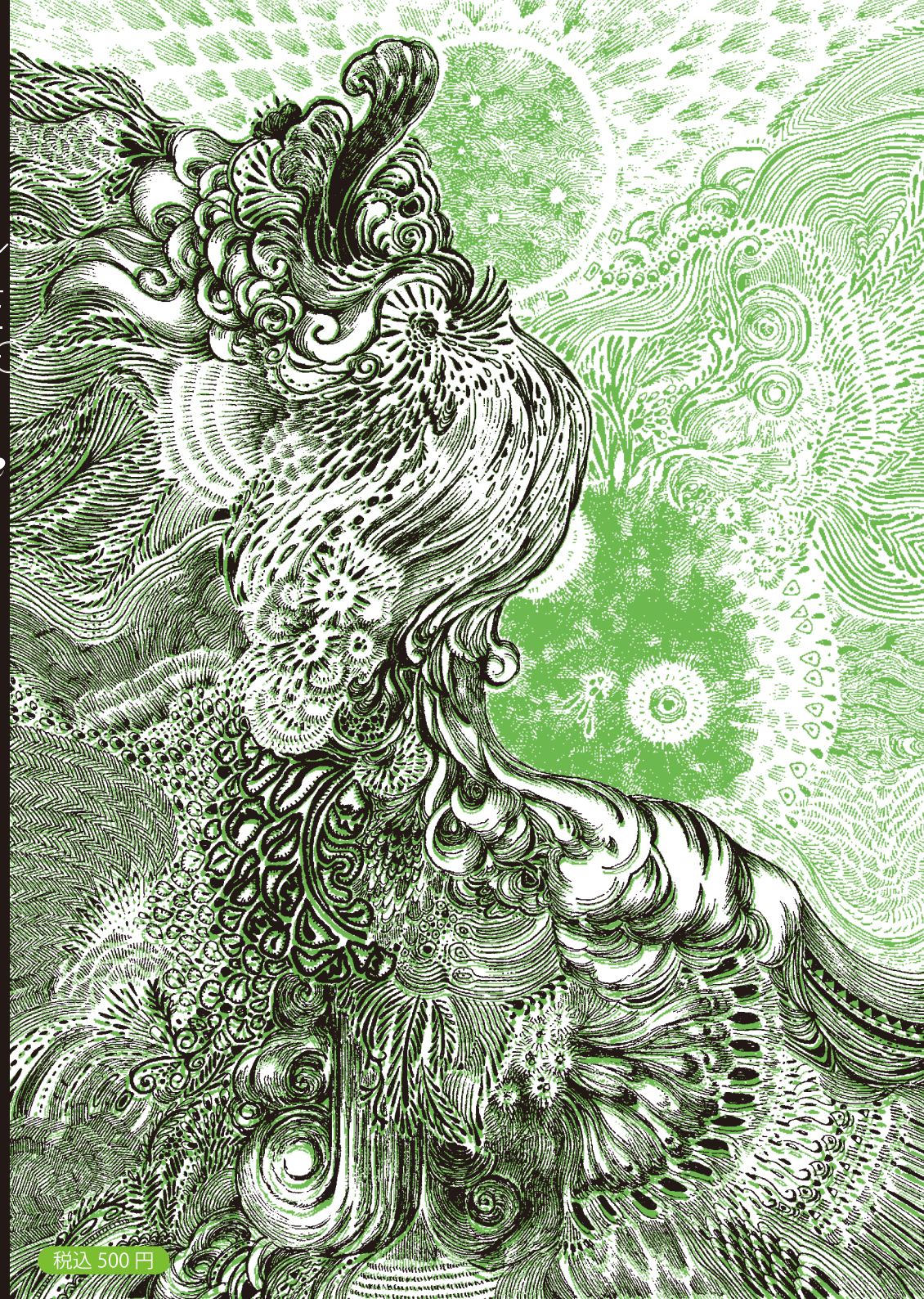
尾道草紙

尾道市立大学 創作民話の会

尾道草紙

12

尾道市立大学 創作民話の会



税込 500 円

尾
道
草
紙

12

尾道市立大学 創作民話の会

はじめに

日本文学学科 教授
光原 百合

尾道市立大学創作民話の会発行、『尾道草紙12』をお届けします。本書は、二〇一六年度尾道市立大学研究成果助成を受けて制作しました。この場を借りて、関係各位に深く御礼申し上げます。

尾道市立大学芸術文化学部日本文学科と美術学科の共同制作作品集『尾道草紙』。早くも干支が一巡りするほどの歴史を刻んだのですね。ご報告が遅れましたが、十周年を迎えた記念にささやかな企画制作を行いましたので、今号でそのこともご紹介しています。

日本文学科の学生たちが綴る尾道を舞台とした物語は、毎年それぞれ個性的ですが、偶然にも「その号全体の傾向」のようなものが現れることがあります。

ます。今回は恋物語が多かったようです。例年の尾道草紙ではラブストーリーは少数派なので、印象的でした。舞台となる尾道のどこかの場所も、初めて登場するところから尾道草紙ではすっかりおなじみのところ、様々です。美術学科学生諸君の力作イラストとともにお楽しみください。

そして本書を片手に尾道を散策していただき、それぞれの物語の舞台を確かめたり、ご自分の物語を見つけたりしていただければ、これほど嬉しいことはありません。

本書収録作品が、末永く尾道の街に根付くことを祈りつつ――。

もくじ

02	はじめに	篠原彩	絵・田中智美
07	さくら	鈴木菜月	絵・指田葉月
15	井戸の中の猫	立坂鞠奈	絵・大仁田桃
27	祭りの日の思い出	卜部文瑳綺	絵・矢内早由紀
37	良神社の狛犬	田口悠	絵・吉田奈央
47	帆雨亭へようこそ。	難波日向子	絵・鷺尾英玲奈
55	ある夜のお話	百武彩花	絵・平川耀子
63	青葉時雨の降るころに		
77	創作民話マップ		絵・尾畠雛子
84	おわりに		

5r ~ 24

「電車に揺られること約二時間。五年ぶりに尾道へとやって来た。」

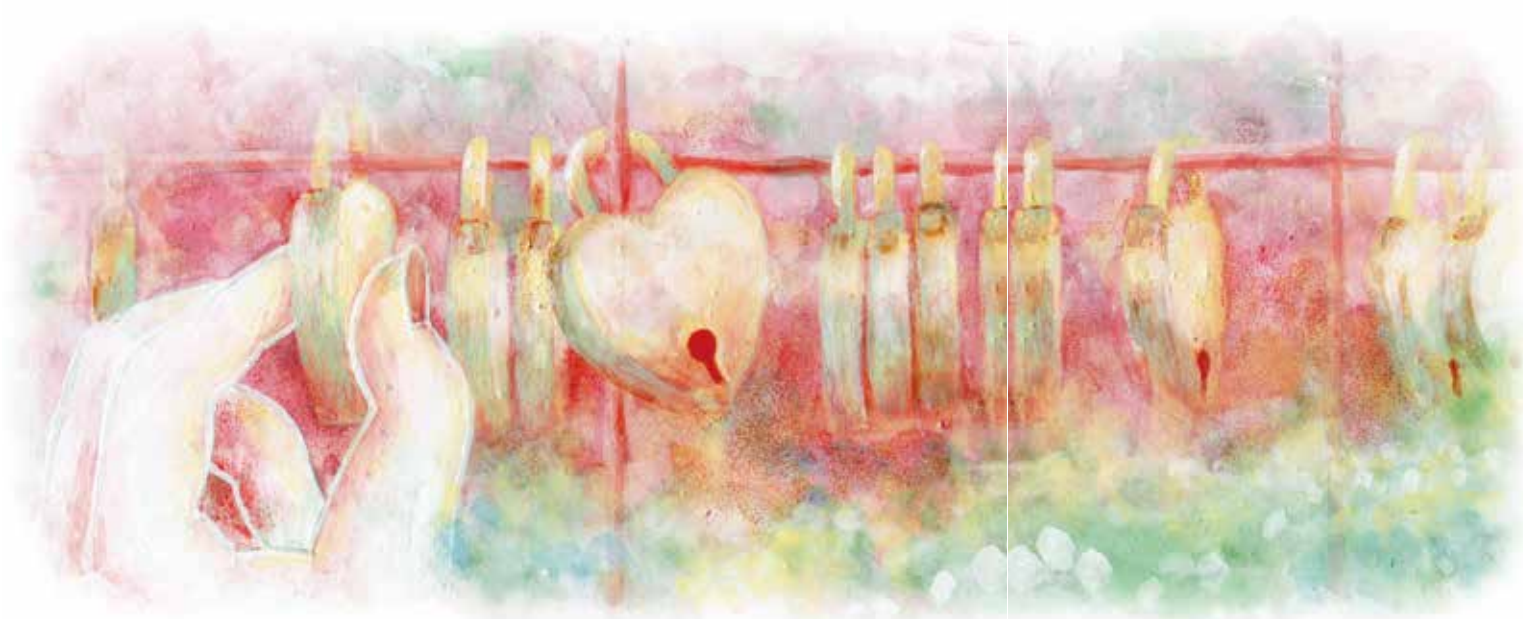
尾道駅に近づくにつれて車窓からは山々に咲き誇る桜が見えてきたが、桜を見に来たわけではない。

尾道は桜の名所として知られており、中でも千光寺公園が有名だ。恋人の聖地としても雑誌などで紹介されていて、展望台のショップで売ってい

るハート型の錠前を設置されているフェンスにかけることで、二人の幸せがずっと続くのだという。五年前、付き合い始めたばかりの彼氏と初めての旅行で尾道を訪れたとき、私たちは記念にお互いへの愛の言葉を書き込んだ錠前をかけた。後で友人から「そういうおまじないに頼らなくても、さくらは彼とうまくやっていけるでしょ」と冷やかされたのをよく覚えている。

しかし、そんな友人の言葉は裏切られることになる。素敵な愛のおまじないは私たちには役に立たなかった。信じていた私が馬鹿だった。三日前、そろそろ結婚を考えたい私と、まだ結婚はいいと言おうかと意見が衝突し、「もう別れてやる！」と吐き捨てて彼の家を飛び出してしまったのだ。いつまでも若くはないのだから早く結婚式を挙げたいのに、彼は何もわかっていない。もやもやした気持ちはずっと胸の奥底で渦巻いている。

あれ以来、彼から連絡はない。自分も意固地に



なつて連絡していないから、お互いさまだけど。来るかどうかわからない連絡を待ちながら、ふと愛の鍵のことを思い出した。二つの鍵はお互いが持っている。彼がどうしているかは知らないが、自分はずっと財布のポケットに入れていた。

あんな捨て台詞を吐いて飛び出したのだ。連絡もないし、きつと愛想を尽かされたに違いない。そうだ、もう終わってしまったのだから、錠前を外さなければ。

一度そう思うと、いてもたってもいられなくなつて、仕事が休みの水曜日、勢いのままに切符を買つて電車に乗り込んだ。窓の外は柔らかな太陽の光と青空、そして穏やかな瀬戸内海が広がっているのに、心には大嵐が吹き荒れている。彼への怒りや勢いで電車に乗ってしまった後悔がない交ぜになつて押し寄せてきて、思わずため息がこぼれた。

自分に悪態をつきながら、かといつて今更途中

下車して引き返す気もしなかったの、景色をぼーっと見つめて、努めて何も考えないようにしていた。

電車を降り、ロープウェイ乗り場まで歩く。バスに乗つてもよかつたが、今は歩きたい気分だった。肩を怒らせて大股で歩くさまは、どんなふうに見えるのだろうかどうでもいいことを考えて心を静める。

チケット売り場には、数人が並んでいた。桜の季節なだけあつて、平日でも人が多い。乗り込んだロープウェイは、花見に心を躍らせている人々であふれている。眼下に広がる桜のピンクと木々の緑とのコントラストに時折歓声が上がる中、じつとうつむいて山頂に着くのを待つ。自分だけ、後ろ向きな理由でここにるのが恥ずかしかった。

山頂駅につくと、脇目も振らず駆け出した。ハートの枠の中、赤い台座の上に二匹の猫が寄り添っ

たモニュメントの隣、錠前のたくさんついたフェンスの前にしゃがみ込む。おぼろげな記憶を手繰り寄せて、下のほうから順に見ていった。いくつも重なつた錠前を一心不乱に一つ一つ確かめる。

足が痛くなつて立ち上がったとき、ふと張り紙が目に入った。以前来たときにはなかったはずだと思ひよく見てみると、フェンスの倒壊を防ぐために、錠前は定期的に取り外してお祓いをするとき書いてある。張りつめていた気持ちが一気にほどけた。

なんだ、わざわざ外しに来なくてもよかつたんだ。

終わった後も彼との思い出に振り回されている自分が馬鹿みたいで、鼻の奥がつんとした。この気分のまま帰れそうにはない。間違いなく明日の仕事に支障が出てしまう。公私混同だけは避けたい。

せつかくここまで来たのだから、桜を楽しんで

気分を変えようと、売店で桜のソフトクリームを買つて、一人ぼつんとベンチに座つた。

一口食べるたびに、初めての旅行のことを思い出す。あのときもちょうど桜が満開で、私はカフェモカ味のソフトクリームを食べたんだっけ。

『俺、桜にするから、一口交換しよう』

はにかみながら差し出してくれた桜味のソフトクリームは今まで食べたものの中でおいしかつた。けれど今食べているものは、あの時みたいにおいしいと思えず、なんだか味気ない。

強めの風が吹いて、桜の花びらが雨のように降つてきた。目の奥が熱くて、視界がじわりとにじんんでいる。一口、もう一口と食べれば食べるほど、彼との思い出があふれて止まらない。

『俺、桜好きなんだ。小さい頃ばあちゃんと一緒に花見に行つたことがあつて、そのとき薄ピンクの花びらが風で舞い散つてくのがすっぱえ幻想的に見えてさ、それからずっと好きで。……お前の

こと好きになったのも必然だと思ふんだよな。俺の好きな花と、同じ名前だから』

錠前に印刷された桜のシルエットをそつとなでながら、彼は愛おしそうに目を細めていた。そういう恥ずかしい台詞をさらっと言ってしまう人だった。嘘や冗談ではなく、本心から。

不意に携帯が鳴った。画面に表示されているのは、喧嘩別れした彼の名前。震える指で通話ボタンを押す。

「もしもし」

湿った声で電話に出ると、くぐもった彼の声が聞こえた。

『……この前は悪かった。言葉が足りなくて誤解させたよな』

「……私こそ、ごめんね」

謝罪の言葉はするりとこぼれた。かたくなに連絡を取らなかったのが嘘みたいだった。

『お前と結婚したくないわけじゃないんだ。ただ、今はその後のためにお金を貯める時期だと思つて。だからさ、』

彼はそこで言葉を区切った。そして、「もう少し、待ってほしいんだ。絶対さくらのこと、幸せにするから」

真後ろから聞こえた声に、はっとして振り返る。そこには彼が立っていた。

言いたいことはたくさんあったはずなのに、いざ目の前にすると涙ばかりがあふれて何一つ言葉にならない。

「……なんで、ここに」

「さくらのことだから、錠前、外しにくると思つて」

「でも、今日、」

「日曜と水曜が休みだろ？ 喧嘩したのが日曜だから、勢いで飛び出すなら水曜だって推理して、来てみた」



彼はにっと白い歯を見せて笑う。考えていることは全てお見通しだったというわけだ。

「ここに来たときのこと、覚えてたの」

「お前と初めての旅行に来たときのこと、忘れるわけないよ」

何もわかってなかったのは私の方だ。あんな捨て台詞まで吐いて、自分勝手なことばかり。こんな愛想を尽かされて当然なのに、いつだって彼は、私を一番に想って理解してくれている。

「……もう一回、私と、付き合ってほしい」

「なに言ってるんだよ。まだ別れてないだろ」

あの台詞をなかつたことにしたくて私が言うと、彼は軽く肩を小突きながら当たり前のように言葉を返した。余計に涙が止まらなくなって、顔が涙と鼻水で見せられないほどぐちゃぐちゃになる。かばんからティッシュペーパーを取り出して、人目もはばからず涙を拭って鼻をかんだ。

優しく背中をさすられて、涙も止まり落ち着い



たころ、「一緒に展望台上がろうよ」と彼が言った。手をつないで螺旋階段を上がっていく。階段を上りきると、さわやかな春の景色が視界に飛び込んできた。青空を映してきらめく尾道水道と、その輝きに負けないほどに咲き誇る桜を、しっかりと心に焼きつける。

この先また喧嘩することがあっても、きっとこの景色を思い出せば乗り越えていける。つないだ手の温かさが、それを証明しているような気がした。☺

井戸の中の猫

井戸の中の猫

鈴木菜月

絵…指田葉月

両親の休みが重なった折、私は初めて尾道を訪れた。尾道は近頃、猫の町だと話題に上がることが多い。ニュースで尾道を見た日から、これは行かないわけにはいくまいと、両親にしきりに連れて行ってとせがんでいた。私は、家族からも友人からも呆れられるほどの猫好きで、毎日のようにネットで猫の動画を巡回し、猫グッズが目につけばつい手を出してしまう。気付けば身の回りには

るもののほとんどが猫柄だ。洋服、鞆、ポーチ、スマホのカバーに至るまで猫尽くしである。その時は、ガイドに案内され尾道駅から歩いて古寺巡りをした。途中に、昔使われた、もう枯れた井戸があった。ガイドが井戸を指しながら、「尾道は井戸の多い町としても有名なんですよ」と言っていた。猫だけでなく井戸も多いのか、と思った覚えがある。次々と他の観光客がガイドの



指した井戸を素通りしていく中、私はなぜだかその井戸にとっても惹かれた。重そうな木の蓋が乗せてあり、井戸の中は覗けなかったが、まるで、中に何かがある、それとも誰かが待っているような——そんな感覚がした。しかし、昔使われただけの井戸に時間が割かれるわけもなく、その時はよく見ることができずに過ぎた。それからはお目当ての猫を探したり千光寺からロープウェイに乗ったり、観光に夢中になるうち、あれほど惹かれた井戸の事はすっかり忘れたのだった。

ところが、大学生になった頃テレビで尾道の特集をしているのを見かけたときに、はたと井戸の事を思い出した。そういえば、私はどうしてあの時あの古い井戸に吸い込まれるように惹かれたのだろう。不思議でたまらなかった。一度思い出してしまくと、こびりついたようにずっと井戸の事が頭の中に残り続けた。いてもたってもいられなくなつた私は、もう一度尾道を訪れることにした。

午前十時頃、私は尾道駅に降り立ち、そこからガイドに付いていったことを思い出しながら歩いた。一度通った道だし、石で造られた案内表記も所々に立っていたので、迷わず井戸のところまでたどり着いた。

携帯を取り出し、時間を確認する。十時四十八分。そろそろお腹も減ってくる頃合いだ。井戸を見終わったら、このまま商店街に降りてお昼を食べよう。それから軽く散策し電車に乗れば、夕方には家に帰りつくだろう。下の方にある商店街の通りを眺めながら今後の予定を考え、私は井戸に向き直った。ぐるっと回りこんで観察し、写真を一枚撮った。あの時惹かれた井戸は変わらず不思議な魅力を醸し出しており、中に何かが、誰かがいるような気がしてならなかった。

なんだか緊張して息を吐き、おもむろに横に視線を移すと、ちょこちょことキジトラの猫がこちらへ歩いて来ているではないか。反射的に屈み込

の届かない深い井戸は、真っ暗で何も見えることはなかった。

なんだ、あれだけ気になっていた井戸なのに何も見えないや。

そう思ったときだった。

たちまち足元にいたキジトラの猫が跳び、井戸の縁に乗ったかと思うと、そのまま井戸の中に落ちていった。

「あっ！」

私はとっさに手に持った蓋を投げ捨て、井戸の中を覗き込んだ。その時だ。井戸の縁をつかんでいた私の手が、するつとすり抜けた。体はバランスを崩し、前のめりになり足が浮いた。

目を覚ました。体を起こし、ぼんやりと靄がかかった頭を軽く左右に振る。辺りを見回したが、真っ暗で何も分からなかった。私は手探りで携帯を探し、ライトを付けた。かび臭く、どんよりし

み、「おいで、おいで」と両手を前に出した。キジトラは怯えることなく、手のひらに頭をすりつけてきた。私は口の端がどどん緩むのを抑えもせずに、よしよしと耳の裏を撫でてやった。なんて可愛らしいのだろう。上から、下から、斜めから、視線を合わせて写真を撮ったところで、はつと私は井戸のことを思い出し立ち上がった。キジトラのおかげで、幾分か緊張もほぐれたので、ついに井戸の蓋に手をかけた。キジトラの猫はまだ撫でてほしそうに足に体をすりつけ、じっと私の顔を見上げてきた。

「井戸を確認したら構ってあげるから、ちょっと待ってね」

キジトラに微笑みかけ、蓋を一息に持ち上げた。思ったよりも、蓋が重くてガクンと腕が下がったが、力を入れて持ち直し、いよいよ中を覗いてみた。

しかし、当然と言えば当然なのだが、奥まで光

た空気に、埃がチラチラと漂っている。下は湿ってふかふかとした地面で、周りは苔むした石の壁に囲まれていた。そして、次に上を見上げた私は絶句した。はるか上方に、豆粒ほどの小さな光がぼつんとあった。こは、本当にあの井戸の底なのか？ 目を見開いたまま固まっていると、背後からさく、という地面を踏む小さな音がした。

私は肩を震わせて音のした方にライトを向けた。するとさっきまで石壁だったところがいつのまにか洞窟になっており、その暗闇の奥からあのキジトラの猫が現れた。

「あ、さっきの猫！」

無事だった。怪我もないようだ。まぶしそうに目を細めながら、軽やかな足取りでこちらへ近づいてきた。良かった、と安堵したのも束の間、

「まさか、お前も落ちたのか？」

キジトラは私にそう話しかけた。続けて、面倒なことになった、とぶつぶつ考え込んでいる。こ



のあまりにも奇妙な光景には、出かけた安堵の溜息も変な声の悲鳴に変わるといふものだ。するとキジトラは不満そうに口を尖らせた。

「そんなに驚くなよ。お前を助けてやろうつてのに」

「……助ける?」

「だって、ここから出たいだろ? 出たくないなら、いいけどな」

「ちよ、ちよっと待って!」

地上での可愛い仕草から一転、そっけなく踵を返し、暗闇へ姿を消すキジトラを、私は慌てて追いかけた。奥へと続くらしい洞窟は私の背丈よりほんの少し高く、横幅は狭かったが立って歩けた。キジトラは一体私をどこへ連れて行く気なのか、とつとと歩くので、見失わないように私は早足で追いかけた。

暗くはじめとした洞窟をしばらく歩いていくと、突然、一気に開けた場所に出た。明るい光に

目がくらんだ私は、不意の段差に足を踏み外し転倒した。地面はふかふかの土だったので怪我はせずに済んだが、なんだか気恥ずかしくなり、すぐ立ち上がって土を払った。今まで通ってきた洞窟と打って違って不思議と明るいその場所は、ドーム状で天井は高い。だんだんと光に慣れてきた目であたりを見渡せば、先ほど倒れ込んだ地面は太陽も無いのに草が生え、所々に花も咲いていた。私はドームのあちこちを見上げた。ドームの壁全体はほんのりと黄色に染まっている。その壁にはくぼみや出っ張り、通路のようになった溝があつて、そこではたくさん猫がのんびりしていた。彼らは私を一瞥することはあれ、威嚇したり逃げたりしなかった。大抵は眠っているか、大きなあくびをしているか。私の足元にもそこら中に猫たちがおり、子猫三匹が追いかけてこをしていた。一匹が前の子猫の背中に飛び掛かり、ごろごろと転げまわっている。

ここは信じられないほど穏やかな時間が流れる場所だった。ドームはこたつの中のような温かさがあり、とても居心地が良かった。ほんのりと甘い香りが鼻をくすぐる。猫たちを見てみるとあくびが移り、眠気を誘われてしまう。ぼんやりと立ち尽くしていると、先を進むキジトラから叱られた。

「こつちに来い。猫又様ねぢまたがお待ちだ」

私は慌ててキジトラの後に続いた。キジトラに案内されたのは、ドームの一番奥、大きなくぼみだった。周りを花に囲まれたそこで、見上げるほど真つ白で大きな毛玉が動いている。私はぎよつとして、毛玉をまじまじと見つめた。すると、その毛玉から、二つに分かれた尻尾と、大きな耳がひょっこり現れた。そして、ついに顔を出したその猫は、私を見下ろした。ぼつちり合った目は瑠璃色をしてキラキラと光を放つ。

「大丈夫かい。ぼーつとしているけど」

唐突に話しかけられ、私は声が出なかった。青や紫の光をチラチラと放つ目に、大きな口からは鋭い牙が見え隠れする。ばさばさと伸びたひげにピンク色の鼻。こんなに大きな猫を見たのはもちろん初めてだった。なんて美しい毛並みをしているんだろう。白くつやつやの毛は触らなくても手触りが伝わってくるようだ。ふわりと空気を含んだ毛が、猫又の動きに合わせてゆらゆらと揺れる。「ま、そう緊張しないで楽におし」

何も言わず、動きもしない私を猫又は緊張していると思っただろう、顔に似合わない優しい声を出した。座るように促され、私は固まった足をゆつくり曲げながら正座をした。いつの間にか隣にいたはずのキジトラはいなくなっている。あたりを見回してキジトラを探していると、猫又がおもむろに言った。

「さて、早速だがお前を地上に帰してやろうかね」「えっ」



私は猫又の帰すという言葉に少し面食らったが、深い安堵のためいきをついた。なるほど、キジトラはこの猫又の妖力を借りて私を地上に帰そうとしたのだと分かった。

「んん？ 帰りたくないのかい？」

私の気のない返事に、猫又は不思議そうに声を上げた。

「か、帰りたいです！」

「ふふん、そうだろうね。じゃあまず、お前の名前を教えとくれ」

私は、フルネームで「タナカミサキ」だと答えた。すると猫又は、静かに「ミサキ」と名前を呼んだ。猫又の声は決して大きくないのに、私の名前はドーム内に反響し、ふわっと消えた。しばらくして、猫又は前足を組みなおし恐ろしいことを口にした。

「今ので、お前にちょっとした呪いをかけたからね」

「呪い!？」

「そうさ、この井戸の中であったことを人に話すと、お前も猫にになってしまうからね」

「そんな……」

「何、誰にも話さなければいいことだ。ここのとを人に知られると困るんだよ」

猫又は、このドームの話をした。ここは、尾道中の猫が憩いを求めてやってくる場所だった。人間には絶対不可侵の猫の楽園。あの井戸は偶然にも、その入り口となっていたのだ。私は妖気にあてられやすい体質らしく、人間が入れないようになっていた井戸に落ちてしまったのだらうとのことだった。人間が迷って来たことなんて初めてだよ、と猫又は笑った。

尾道の猫は、昔から人と深く関わり暮らしてきた。しかし、近年猫の町を盛んにアピールしている尾道には、年々猫目当ての観光客が増え、猫たちはゆっくり休める場所を失いつつあった。人間



は勝手なもので、眠っていようとお構いなしに体をあちこち触ってくるし、写真のシャッター音はうるさいし、怒って噛みつきうものならこちらが悪者にされてしまう。

気の遠くなるほど昔から尾道に住み着き、ずっと尾道の猫を見守ってきた猫又は、疲れ切った猫たちにひどく心を痛め、地下にこの憩いの場を作った。ここが知られてはたくさん人間がやって来るようになり、楽園の意味がなくなってしまう。そのため私に口封じの呪いをかけざるを得ないことを、許してほしいと言われた。

「また尾道において。ここにはもう入ることはできませんが、尾道は良い町だろう？」

「はい、とつても！ また猫たちに会いに来ます」私は最後に、どうしても猫又に抱きついてみたかったので、恐る恐る申し出てみた。すると快く了承してくれたので遠慮なく、心ゆくまで、思い切り抱きつかせてもらった。猫又の毛並みは思っ

た通り、ふわふわのつやつやで、まるで全身を柔らかな毛布で包まれているような気分だった。じわりと温かく、花のいい香りがする。私は気持ちよさに目を閉じた。

ふと目を開くと、私は地上に戻っていた。時計は十時五十一分を示していた。私はさつき放り投げた井戸の蓋を持ちあげ、井戸に乗せ直した。井戸での出来事を人に話すと、猫にされてしまう。もちろん、猫になってしまうのは……まだ、若い身空でなってしまうのもつまらないので、老後呪いを使わせてもらう日が来るかもしれない。そうだ、死ぬ前に一人だけ、秘密を守ってくれる人に話をするのだ。そうして猫になったら、いつの日かこの楽園に戻ってこよう。尾道の猫とともに、猫としての新たな生涯を過ごそう。その日が来るまで黙っておくことにしよう。私は井戸に背を向け、昼食をとるため商店街へ歩き出した。■

祭りの日の思い出

祭りの日の思い出

立坂 鞠奈

絵…大仁田 桃

つい先ほどまで、私は走っていた。家に一人でいるのが耐えられなくなって、お祭りデートにも関わらず、ジーンズにTシャツという家にいた格好そのまま待ち合わせ場所に飛び出した。

走ってきたのに待ち合わせ場所に彼はいない。住吉の花火まつりだから人も多く、皆友人や恋人達と一緒に私の前を通っていく。その場に立ち尽くしていると時間に遅れてやってきた宗一くんが

走ってきて私に頭を下げた。

「ぎこちない雰囲気のまま二人で並んで言葉少なに商店街を歩く。私は彼が遅れたのもあって喋る気になれず、彼はもともとあまり喋るほうでない。何を言うでもなく隣をあく彼は、私の機嫌を窺っているのか横目で私をちらちらと見ている。かと思えば商店街に入ると隣の彼女には目もくれず、他の女性を気にし始めた。華やかな浴衣を着て髪もきれいにかんざしでまとめている女性とすれ違えばふりかえってまで目で追っている。

私はもう限界だった。

「ねえ、これなら一緒に歩かなくてもいいんじゃないの」

彼は一瞬ポカンとした顔をして、それから頬を掻いた。

「えっと……遅刻したこと、まだ怒ってる？」

「違う」

人の流れの中で二人立ちすくんで、私は髪をか



きあげた。ふつふつと黒くて熱い感情がせりあがってくる。

「私じゃなくて、他の女の子でもいいんじゃないの。私、一人で行くから他の子と一緒に行ったら？」

「神崎さん、ごめん、俺……なんで神崎さんが怒ってるのか分からない。俺が何か悪いことしたなら謝るから、ごめん、あの……許してほしい」

「ごめんごめんって、うるさいのよ！」
分かってないくせに、謝るだけで済まそうとするな。

腕に伸ばされた手を振り払って、怒りのままに手に持っていたバッグを投げつける。おろおろとしていた彼氏の顔にバコン、という鈍い音をたててぶつかった。

「私の気持ちも、少しは考えてよ！」

叫ぶように吐き捨てて、また伸ばされていた手をすり抜けて人ごみにまぎれるように駆け出した。

う。道の両側は白い電灯に照らされた屋台が並んでいる。道を歩く人々は皆たこ焼きやりんご飴、おもちゃの鉄砲に出目金が泳ぐ袋なんかを持っていた。どうせ何か買って祭りを楽しむことはできないんだから、花火くらい見てやるか。今からなら、見晴らしのいい千光寺の方へ行っても私一人くらいなんとか場所を取れるだろう。

千光寺行きのロープウェイに並んでいる人たちの脇をすりぬけ、隣にある坂から直接上つていく。家と家の間をすり抜け老人にはきつそうな坂道を進む。淡々と足を動かしていくうちにカップルを二組と、老夫婦を一組、男子高校生三人を追い越した。別の道とつながり景色がひらけたところで、家族連れに追いついた。お父さんの手をにぎった女の子が、早く早く、とその手を引っ張っている。

昔、私も同じことをしていた。お父さんとお母さん、私を中心にして三人で手をつないだ。私は

た。後ろで「神崎さん！」と叫ぶ声が聞こえたが、どうでもよかった。人々は全力疾走する私に一瞬驚くけれど、すぐに自分たちの世界に戻る。そして、大切な誰かに微笑むのだ。どうしようもなく胸が苦しい。今すぐ誰もいない場所に行きたいのに、あふれるような人がそれを許さない。どれだけ足を速めても、流れていく笑顔からは逃れられない。吐き捨てたいくらいうんざりして、髪をかきむしりたくなるような怒りが湧き出て、限界だと感じたので足を止める。目を閉じて息を整えて、わめき散らしたい衝動を抑える。

もう家に帰ろうとバス停に向かおうとして、財布がないことに気がつく。そういえば財布はバッグの中だった。彼に電話をするのも気が引けるし、ここは彼が電話してくるのを待とう。とりあえずポケットに突っ込んでいた携帯電話を取り出してチェックする。着信はなかった。

行くあてもないままふらふらと商店街をさまよ

どこに行ってもその先に素敵なものがあると確信していて、だから早く行こうと急かしながらお父さんの手を引っ張った。お父さんもお母さんも、そんな私を見て困ったなあと、笑いあっていた。

今の私の手には、固くて冷たい携帯電話が握られている。

しばらくそこに立ち尽くしていた。さっき追い越した人たちは笑い声を残して私を追い越していった。そこから何組かが私の隣を通り過ぎても、動けなかった。

「あんた、ずっとここにおるねえ」

声をかけられたときも、話しかけられていると思わなかった。

「おねえさん、あんたのことよ。ズボンはいった黒髪のお姉さん。」

我に返って、振り返る。先ほど通り過ぎた場所にある、赤く塗られた柵に近寄る。

「お姉さん、えらいしよげとる顔しとったけえ、

心配したんよ」

「……どうも……」

石が喋っている。石の隣には紙が貼られていて、それによると正確には福石猫というらしいが、無機物が喋っている。赤い布の上にちよこんと乗ったその石には、顔が描かれている。赤い鼻が特徴的だ。まん丸な体、耳は丸いし先入観なしに猫と見るのは難しいのではないだろうか。

「福……あなたを拝んだら、福が来るの？」

「ほうじゃねえ、そういわれとるねえ」

「私が拝んだら、福をくれる？」

「保証はできんなあ」

なんだそれは。お願いされる立場ならもうちよつとしっかりとってほしい。

「壊れてしまった人の絆を、なおすことはできる？」

「できん。壊れてしまったものは、わしの力でもどうしようもない」



「そんな、そんなこと言わないでよ。」

あんなに笑いあっていたのに。あんなに、温かいものだったのに。

握る携帯電話が震える。抑えようと強く握っても震えは止まらない。震えているのは私だったからだ。

「人の世は出会いと別れ。その繰り返しで生まれたもので世界がまわるんじゃない。わしにできるのは別れをなくすことじゃない。そんなたいそうなことはできないよ。あんたはなくなるばかりと思つとるけど、残るもんもある。あんたはそれを忘れとるよ」

何を言つてその場を離れたのか、覚えていない。顔を上げると石の階段が伸びていた。その階段を先ほどより多くの人が上つていく。

松の木が枝を伸ばしている下を力の入らない足で進んでいく。石段の脇には小さな広場があり、そこに多くの人が花火を見ようと集まっている。

私は花火を見ようという気もうせて、石段に腰をおろした。体を丸めておでこを膝にくつつける。右手の携帯は音も振動もない。泣いてお願いしても、不思議な存在に頼つてもどうしようもないなら、一体私はどうしたらいいのだろう。

今日は初めてのデートだった。時間ぎりぎりまで着て行く服を選んでいたときに、机の上で震えだした携帯電話。

どうせ遅刻なんでしょ、と軽口をたたこうと相手も確認せずに電話をとった。

『もしもし、涼子ちゃん。ごめん、ごめんね、お母さんとお父さんもう——』

予感があった。私が成長するにつれ、二人の会話は少なくなつていった。家族ででかけることもなくなつて、必要なことは私を仲介に話をするようになった。実家に帰省するたびに、二人の距離

が離れているのは感じ取っていた。それでも家族という形は続くものだと、私は思っていた。それなのに。

「もしもし？」

びくりと体が引きつった。顔をあげ、振り返る。知らない男性が私より数段上の石段から電話をかけていた。

「え？ 代わる？ もしもし？ お父さんなあ、きれくに見えるところ取ったからな！ 走って転ばないように、お母さんと手、つないでくるんだぞ！ はい、はい」

そこで電話が切れたのか、そのお父さんは「よしっ」とガッツポーズをしている。

肩の力を抜いて、視線を落とす。昔、お父さんはあんな風にしなかった。仕事で忙しい人だったから、場所取りなんてできない。だから三人で来たときにはいつも人でいっぱい、背が小さい私は全然火花が見えなかった。でも、何の妨げもな

い火花を確かに見た記憶がある。私は一体どうやって火花を見たのだったか。

ヒュー、という高い音がした。周囲のざわめきが大きくなり、足元も見えなかった夜の闇が、ふっと明るくなった。瞬間、人の声をかき消すような爆音が響き渡った。思わず顔を上げると、色彩をもった光が闇の中に落ちて溶けていった。真つ黒になった空をぽかんと眺め、ふと視線を落とす。すぐ下の石段に、息を切らしてこちらを見上げる宗一君がいた。

「神崎さん、ごめん！」

私のバッグを持った宗一君は、服も髪も汗でぐっしょりと濡れていた。彼の話によると、携帯の充電がなくなったため電話もかけられず、走り回って私を探していたらしい。

「私もごめんなさい、宗一君。ちょっといろいろあって、冷静じゃなかった。迷惑かけて、ごめん」
「いや、俺も神崎さんに悪いことしちゃったし

……」

バッグからハンカチを取って彼の汗をぬぐった。自分で拭けるよ、と顔を赤くする宗一くんの話や、話を聞くと彼もどうやら福石猫に会ったようだ。

私に謝りたいと祈ったところ、「あの子のはどうしようもないけど、お兄さんのはきつかけくらはなし、後は自分でなんとかしー」とのことでお告げのとおりここに来たらしい。

「すごいよあの……石？ ねずみ？」

「猫だよ」

という会話をして、一緒に広場で火花をみた。

「きれいだね」というと宗一君は「あー、神崎さんのほうがー」と詰まっていた。言葉をうやむやにしてしまった宗一君を見つめると、彼は「あー……」と髪をガシガシとかいた。そして私に向き直る。バッグに手を入れた。

「か、神崎さん。これ、神崎さんに」

彼が手渡してきたものは長方形の赤と金の布で

包まれていた。「開けてもいい？」との許可を取って布を開く。袋状になっている布から中身を取り出すと、赤く大きな玉が一つついたかんざしが入っていた。
「これ、神崎さんに似合うって思って買ったんだけど、今日の祭り、女の子は皆金色のしやらしやらしたやつとか、こんな地味なやつじゃなくてきれいなものつけて。俺こういうの買ったことないし、神崎さんに趣味悪いって思われたくないから、どうしようって思ってた。でもさ、これ、嫌いじゃなかったら来年、これつけてさ、俺とまた祭り行ってくれない？」

宗一君はつかかりながらも顔を赤くしてそういった。その後で、いや、来年の約束とか重いなら全然気にしなくてもいいんだけど、とつけくわえた。

「そうだね。来年も、宗一くんだったら夏祭り、一緒に行きたいと思うよ。」

彼が伸ばした手が私の右手を包む。ああ、そうだった。いつかの花火大会で、お父さんは私を肩車して花火を見せてくれた。お互いがはぐれないように、お母さんとお父さんはしっかり手をつないでいたのを覚えている。その記憶は両親にとつてはもう苦々しいものとして忘れてしまったかもしれない。私が大好きだった両親の姿は、もう現実にはどこにもこのこっていない。それでも私は楽しかった思い出として覚えている。きつとこれからも、私は覚えている。私が愛したものは、私が残すのだ。

彼の手を離さないよう握り返し、もう一度空をみた。彼ならきつと、思い出作りにもつきあってくれるだろう。今日を忘れまいと、心に刻む。湧き上がる歓声の中、夜空にうちあがる鮮やかな大輪を、つないだ手のぬくもりを感じながら静かに見つめた。 ㊦



良
神
社
の
狛
犬

良神社の狛犬

卜部 文瑳綺

絵・矢内 早由紀

良神社の『青鬼』といえども子供たちにとってそれはそれは恐ろしい存在であった。

良神社の広い境内は子供たちにとって絶好の遊び場である。子供たちは毎日毎日良神社の境内で鬼ごっこをしたりかくれんぼをしたりして遊んでいたが、それも『青鬼』に見つかるまでのつかの間の楽しみである。

『青鬼』というのは、良神社の年老いた神主の事

である。

子供たちがやってきて神社で遊び始めたら、神主は声を荒げる。特に、ご神木の楠によじ登ろうとしたら、守り神の狛犬に触ろうものなら、それはもう顔を真っ青にして怒る。

「おみやーら、なにやっとなんじゃあああああ」の大音声と共に箒を振りかざして追いかけてくる。子供たちにとってはこれ以上ない恐怖である。

「青鬼のやつ、少しくらい遊ばせてくれてもええのに」

子供たちはわざわざ海の方まで出て遊ばねばならぬことに不満を感じていた。親たちに訴えても、「神主さんの邪魔しちゃいけんよ」「神社は遊び場じゃないんじゃけえ」と言っただけにも取り合ってもらえない。

「なんじゃあ、青鬼なんて、おらんようになってしまえ！」

そんな子供たちの願いはやがて叶えられることとなった。

ある冬の朝、参拝にやってきた大人が、境内で箒と共に倒れている神主を見つけた。躰は冷たかった。

子供たちは青鬼のいなくなった境内で散々に遊びまわったが、どこか物足りなさを感じていた。今にも本殿の扉を押し開けて、「なにやっとなんじゃあああああ」の大音声と共に青鬼が現れてくれな

いか、と。

*

目が開いた。躰を全く動かさない。はて何故であろうと自分の体を見降ろそうとしたが、顔さえ動かない。仕方なく唯一動く目を可能な限り動かして周囲を見回してみると、自分はなんとあの懐かしい良神社にはいるではないか！ 神主は驚きに声を上げようとしたが、喉が動かぬ。それもそのはず、神主の躰は、良神社のあの痩せこけた狛犬に変わっていたのである。

理由はわからぬが、自分はあの狛犬の中にいる。神主はまた、目をぎよろぎよろと動かし周囲を見回し、月光に照らし出された楠が以前と変わらぬ姿で雄々しく枝を伸ばしているのを見て安堵した。境内の中もきれいだ。見苦しい落ち葉はなく、清潔に保たれている。町の人が世話をしてくれて



いるのだろう。

どんな不思議かはわからぬが、自分はどうかやら
狛犬になってはいるらしい。躰は全く動かさぬが、
こうして物言わぬ身で神社を守り続けていくこと
も悪くない。

こうして神主は狛犬として神社で暮らしていく
ことを決めたのであった。

*

神主が狛犬の身に宿ってから、いくらかが過ぎた。
神主は不満であった。なにしろ、昼になると子
供たちが現れては、境内で散々に声を上げて走り
回るのである。しかも自分がいないからか平然と
楠にしがみつき、木登りする。狛犬の台座に上っ
て、神主が宿っていることも知らずべしべし叩い
たりする。痛みは感じないものの、叩かれていい
思いをするわけではない。

(——神社は遊ぶ所じゃにゃーとあれだけ言うた
に！)

今日も子供たちは神主のいなくなった境内を飛
び回っている。彼らに疲れや飽きというものはな
いのだろうか。神主の座する台座に子供たちが
上ってくる。

台座によじ登った掌が、神主の胴体に触れた。
その子はどうかやら本殿を見つめているらしかった。

「青鬼、本当に死んでもーたんじゃのう」

ぼつりと落とされたその声は、遊びまわる子供
のものにしてはひどく細かった。

そんなひとりきりの狛犬としての日々を、どれ
ほど過ごしただろうか。

神主が目を開けた時、夜だというのに強烈な光
が目を刺した。がやがやと大声が耳に届いて、は
て何事かと神主がぎよろりと目を回すと、神社の
境内には未だかつてなかったほど多くの人がひし



めき合っていた。その中の何人かは水をかけられていたり、腕に白い布を巻いてもらったり、老人は負ぶわれたりしているが、誰もが身を震わせ、怯えているのがわかった。

境内の外に眼を向けると、たちまち熱風が目を焼いた。海辺の尾道にはふさわしくない熱風である。

——火事である。

尾道の町が、燃えている。神主は大きく眼をぐるりと回した。参道の向こうまで真っ赤に染まっている。しかし、幸運にも神社は風上にあつたから、こちらまで火は届いてこないようだった。神社は無事だ。

その時だった。

炎の中に、子供の姿が見えた。

子供ばかりではない。おそらくその家族なのであろう何人かの姿も見える。彼らは炎に囲まれて、逃げ道が見つかからないのか、右往左往している。町中から、悲鳴が聞こえる。彼らはここに来られ

ないのか、炎が邪魔をしているのか。

お前たちは生きねばならぬ。焼けはてた町の中で力強く立ち上がり、再び町と海と風と共に生きねばならぬ。お前たちは。

——お前たちは、生きねばならぬ。

神主は前足を持ち上げた。台座から前足が離れる。ぼろぼろとかけらが落ち、いくつかは地面で碎けた。そのまま、後足。首。胴。そうやって四肢が自由になると、神主はひらりと参道へ降り立ち、燃え盛る町の中へ身を躍らせた。

*

死んじゃうんかなって、思った。

夢の中で青鬼に追いかけていたら、父ちゃんに叩き起こされて、ようわからんまま「逃げるぞ、逃げるぞ」と言われた。夜なのに熱いし、明るいなあ思うとつたら、母ちゃんが水でびしゃびしゃ

にした布をかぶせてきた。

「これかぶつとくんよ、脱いだらいけんよ」

母ちゃんに手を引かれて家を出たら、町中真っ赤じゃった。

「あんた、どうするんじゃ、どこへいくんじゃ」

「とりあえず海の方に出るんじゃ、そうでもせにゃあ、助からん」

「海の方はもう火が回つとるじゃろ！」

父ちゃん、母ちゃん。熱いよ。逃げようよ。

もう火が目の前まで来とった。もうどこにも行けん、前にも後ろにも行けん。

「ええか、ええか。わしが先に行くけえ、お前、そいつ抱えてついてこい、ええな」

母ちゃんに抱き上げられた。

父ちゃんが、火の中に入って行こうとする。

やめて父ちゃん、やめて。やめて。

燃えちゃうよ。

父ちゃん、つて叫ぼうとした時、炎の向こうに

狛犬さんはそれを見ると、勢いよく神社の方へ駆け出した。

狛犬さんが行く先行く先瓦礫がれきを払いのけて、わしら以外の人もみんな狛犬さんについていった。狛犬さんの足は炎を踏んだせいかどんどんぼろぼろになっていったけど、炎の中に人を見つけるたびにそっちに行つては道を作つて、その人たちを連れてきた。

狛犬さんに連れられて、わしらは神社に逃げた。神社の中にもつともつとたくさん人がおつた。わつと大人が駆けてきて、「本殿に入れ、本殿に入れ」と運ばれる。

狛犬さんの方を何とか首をひねって見てみると、狛犬さんがまた身をひるがえして炎の中に突っ込んでいくのが見えた。

*

ぬつと大きな影が見えた。その影はゆつくりとした足取りでこつちに向かつてきて、父ちゃんは「なんじゃ、こりゃあ……」つて言つたけど、わしにはわかつた。

「狛犬さんじゃ……」

良神社の狛犬さん。

いつも登つとつたからわかる。これは良の狛犬さんじゃ。青鬼がおらんようになって、好きなだけ登れるようになった狛犬さん。でも、何で狛犬さん、こんなところおるんじやろう。

狛犬さんはじつとわしらを見つめると、突然前足で足元の燃えている瓦礫を払いのけた。何回も何回もそうやつとつたら、そこだけ道が開けて、狛犬さんがこつちを見た。ついてこい、て言うつもりみたいじゃつた。

「父ちゃん」

「ああ」

行こう、と父ちゃんが母ちゃんの手を取つた。

夜が明けた時、町の一部を焼き尽くし、燃やすものを無くした炎はすっかり消えてしまつていた。ぶすぶすという音や焦げた臭い、白い煙はまだ上がつているが、炎はすっかり姿を無くしていた。

人々は助かつたぞと声を上げた。あちこちで声上がる中、「それ」に気が付いたのは、狛犬によじ登るのが好きなあの子供であつた。

「ねえ、狛犬さんの顔に、ヒビが入つとるよ！」

いつの間にか台座に戻つていた狛犬の顔が、その時、ぼろぼろと崩れ始めた。

一陣の潮風が吹き抜けた。

風は潮の香を神社を越えて運び、山の方へ吹き去つていく。もつと遠くへ、もつと彼方へ。どこへともわからない、果ての方へ。

潮の香りが消えた時、かろうじて顔の形を残していた狛犬の首は、町の人々の見守る中、粉々に砕け散つてしまつたのであつた。■



帆雨亭へようこそ。

帆雨亭へようこそ。

田口悠

絵…吉田奈央

踏切を渡り、家と家の中の狭い急斜面をひたすら上る。Googleマップを頼りに、右へ、左へくねくねとした道を進む。閉店までに間に合うだろうか。

さらに狭い坂道を上ると、ようやく「帆雨亭」とかかれた小さな木の看板が見えた。

ここが、帆雨亭か。

入り口の壁にはメニューがぎっしり張られている。

奥にある中庭では、立派な木に茂った色とりどりの葉が風に吹かれてわずかに揺れている。

iPhoneの画面の右上に目をやると、時刻は十六時十五分。

恐る恐る引き戸を開けると、中から「いらっしやい」という穏やかな声が聞こえた。

「あの、まだ大丈夫ですか」

「十七時までじゃけえね。大丈夫よ」

優しい笑顔で迎えてくれたおばあさんが、私を店の中に案内してくれた。靴を脱いで中に入ると、文豪がそこで執筆している姿が目に見え、やうな、文学の薫り漂う空間が広がっていた。やわらかい畳、木で作られた年季の入った座卓、色褪せた座布団、多くの名作が並べられた本棚、古めかしい時計。文学の街として名のあるこの街の雰囲気とぴったりの、趣のある空間が広がっていた。

「これがメニューね。何にする？」

「じゃあ、レモンスカッシュください」



「はいよ、ちよいと待ちよってね」

そしておばあさんは、ゆっくりと厨房の方へ入って行った。私は窓際の座卓のそばに腰を下ろし窓の外に目をやって、はっと息をのんだ。

まるで、大きな一枚の絵を見ているようだった。窓の両脇には大きな木があり、尾道の街を包み込んでいた。目の前の家の瓦屋根を真上から見下ろすことができ、ここまでの道がどれほど急な坂だったのかがよく分かる。尾道商店街には古びたビルや店たちが頭を寄せ合っていて、わずかに見える尾道水道は驚くほど静かだ。その尾道水道の先にあるのは、私がまだ行ったことのない向島。今日は天気も良く、向島の奥の方までよく見渡すことができる。古いお店や建物がひしめき合ったこの街で、今日もたくさんの方が生きている。でも、もしかすると今この瞬間だけは、みんな動くことを辞めて、街中が停止しているのではないか。そんな気さえするほど、帆雨亭の大きな

窓というキャンバスに描かれた景色は穏やかで、そして鮮やかだった。

「すごい」

思わず声を漏らすと、

「はい、レモンスカッシュ。向島産のレモン使ったおぼあさんがレモンスカッシュを持って出てきた。」

「ずっとここに来てみたかったんです。すごい景色ですね。何て言ったらいいか分からないけど、時間がゆっくり流れているように見えるっていうか」

「時間がゆっくり、ねえ。ふふふ。」

おぼあさんは元々あつた皺をさらに深くして笑う。

「まあ、のんびりしていきんさいね」

そう言っておぼあさんは、ゆっくりと厨房の中に入って行った。

権利もない。私が一方的に蒼くんが好きだけで、蒼くんにとって私は、ただの大学の同級生のだから。

蒼くんは大学へはほとんど来ない。今はアルバイトばかりしていて、大学を辞めるという噂だった。そして昨日、コンビニで偶然会った蒼くん本人に聞いた。

「明日は学校来る？」

「あー、明日大阪帰るんや」

蒼くんは大阪出身だった。それは、地元へ帰ってしまうことを意味していた。

「そっか、何時ごろの電車で行くん？」

「四時半くらいかな」

「へえ、気を付けてね」

数週間ぶりに顔を見られたのに、なんだか複雑な気持ちだった。これが、蒼くんに会う最後になってしまうから。

私、何かおかしなこと言ったかな。

ふと腕時計に目をやると、時刻は十六時十六分。店についた時から、ほとんど時間が経っていない。

あれ、おかしいな。最近買ったばかりなのに。iPhoneの時間も、店に置かれた文字盤が見にくくなった時計も確認したが、すべてが現在の時刻を十六時十六分と示していた。

もう一度窓の外に目を向ける。いったい何が起きているのかよく分からなかったが、この場所なら、本当に時間がゆっくり流れていてもおかしくないような気がした。

でもこれじゃ、何をしにきたのか分からない。

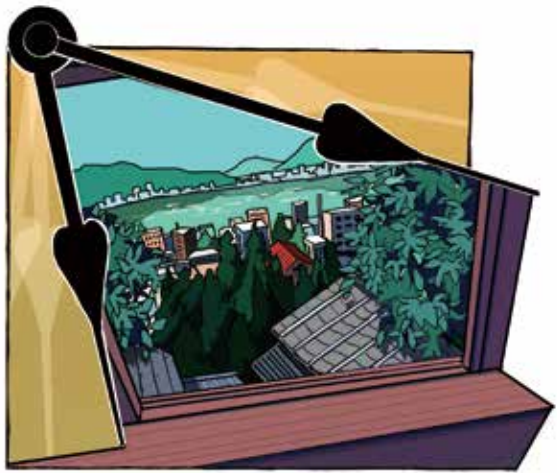
彼がこの街から出て行く時間に、家でおとなしくしているなんてできなかったから、思い立ってここへ来たのに。彼にもう会えないって考えて切なくなる気持ちを忘れるために、ここへ来たのに。

私は蒼くんを止めることはできないし、そんな

「まだ、間に合うんじゃないかいねえ」

厨房にいたはずのおぼあさんが、いつの間にかそばの木の椅子に腰掛けていた。

まだ、間に合うか。



腕時計を見ると、十六時十七分。尾道駅まで走れば、十分かからない。

「ごちそうさまでした！」

財布からレモンスカッシュ代の六百円を取り出してテールの上に置き、急いで靴を履く。そうだが、まだ間に合う。別に、蒼くんが帰ってしまったのを止めるわけじゃない。私はそんな立場ではないから。でも、会えなくなるなら最後に、素直な気持ちを伝えることくらい許されるのではないか。ずっと遠い存在だった人に、今なら追いつける。まだ間に合う。

「蒼くん！」

駅に着くと、十六時二十五分。もう時計は普通に動いていた。時間がゆっくり流れるのは、あの空間だけなのだ。

「藤田さん？ どうしたん？」

蒼くんは駅前の自動販売機でジュースを買っていた。いつもの細身のグレーのスエットにカーキ

色のブルゾン。こんなにどこにでもいそうな服装でも、蒼くんが着るとどうしてこうもかっこよく見えるのだろう。

「よかった、本当に間に合った」

「え？」

蒼くんは、寝癖でボサボサの頭をかきあげた。

「大阪に帰っちゃうんよね。気をつけて帰ってね。でも、最後に自分の気持ちだけ伝えたくて」

「最後？」

「私ね、蒼くんのが好きなんよ」

これで最後だと思うと、素直に言えた。いつもは見られなかった、蒼くんの目をまっすぐ見るこ

とができた。

「それ、本気？」

「うん」

「てか、最後ってなに？ 俺らもう会われへんの？」

蒼くんが笑って言う。



「だって、大学辞めるんじゃない？ 実家帰るんじゃない？」

「え、誰がそんなこと言うたん？」

「え？ 違うん？」

「俺がバイトばかりで大学にあんまり行ってへんから誰かが勝手にそんなこと言うたんやろ。大阪に帰るんは、ちょっと帰省するだけやで」

「なんてことだろう。勘違いだったんだ。」

「そうなんじゃ……。あ、時間！」

「すでに十六時三十分を過ぎていた。」

「何時の電車でもええから、そんなん気にせんといて」

「ごめん」

「ええって。ええこと聞けたし」

「自分の顔が熱くなるのが分かる。」

「ねえ、蒼くん」

「ん？」

「大阪から戻ってきたら、ちゃんと学校に来てね」

蒼くんの足元を見ながら言うと、

「そろそろ単位やばいし、そうしようかな。学校行ったら藤田さんにも会えるし」

顔を上げると、蒼くんはいたずらっぽく笑って

いた。
「そんな蒼くんを見て、うん！と笑顔でうなずいた。」

「お姉さん間に合ったみたいじゃねえ。よかったねえ」

帆雨亭の椅子に腰かけながら、おばあさんがつぶやいた。

「あの、まだやってますか」

入り口から声がする。

「はい、大丈夫ですよ。いらっしやい。何にする？」

おばあさんはゆっくりと入口の方へと向かった。 ㊦

ある夜のお話

ある夜のお話

難波 日向子

絵・鷺尾 英玲奈

私は時々通り過ぎる顔なじみに会釈しながら歩き続けた。隣の大通りを通る車のエンジン音が、かすかに聞こえてくる。

夜の商店街は、観光客でにぎわうお昼どきが嘘みたいに静かだ。でも、この町のそんなところも気に入っている。

子供の頃、ぼんという猫を飼っていた。出会い

は実家の前の溝。怪我をしてうずくまっていたぼんを、祖母が介抱してやったのがきっかけだった。傷が治っても、ぼんは家に居座り続けた。それを見た祖母は、私を指さして、ぼんにこう言った。「あの子と、仲良うしちゃってえな」

両親を事故で亡くし、祖母と二人暮らしの私を気遣ったのだろう。実際のところ、ぼんは当時小学生の私には少々骨の折れる奴だった。ごつごつ

した大きな体と、何度梳いてもぼさぼさの灰色の毛並み。誰か撫でようとしようもんなら、容赦なく引っかいてきて、金色の目でぎらぎらにらむのだ。

「こん子は、ほんまにがんばじゃねえ」

わんぱく、気まま、聞かんぼう。祖母が言った一言が妙にしつくり来て、がんば、から名前はぼん。ぼんはその名の通り、家中の壁で爪とぎをしたり、食卓の魚に飛びかかったり、色々な事をやらかした奴だったが、祖母がぼんを叱っていた記憶はない。ただ一言、「がんばじゃねえ」と言つては、からから笑っていたのを覚えている。ぼんは野良だったせいかな、人に懐かない奴だったが、祖母が背中にある斑をなでると嬉しそうに喉を鳴らした。猫も命の恩人がわかるのか、当時は感心したものだ。

ずんずん商店街を歩き、アーケードの切れ目に





出る。そのまま右にまがって、海へとそのまま歩き続けた。びゅう、と冷え切った風が坂道に吹き上がる。マフラーで口元を覆って一息つく、また歩き始めた。

祖母がよく聞かせてくれた、お話がある。

「尾道には海があるけえ、魚もよおけとれる。その魚を、人間で独り占めせずに猫にもわけてあげよおた。猫をいじめんと、いっつも皆でかわいがつて、猫が死んだら皆悲しがつて泣いたんじや。猫も、自分を大切にしてくれた人たちと離れるのを嫌がった。それを見た猫の神様は、大切にしてくれたお礼にと、尾道におくりものをくれた。一年で一番大きい満月の夜にのう」

「もう聞いたよお」

「だまって聞きんさい。その日だけ、海に浮かぶ島があるんじや。それは死んだ猫が住む島でのう。その島からぼおんと跳ねてこれた猫は、一晩だけ

人間と一緒におれるんじや。もしわしが先に死んだらこのう、その時はぼん、おまえこの子の所に来ちゃってくれえの」

そう言っはいつも、祖母はぼんの背中を撫で、ぼんは気持ちよさそうに目を細めた。

結局、ぼんの方が先に亡くなった。野良猫に喧嘩を売られて、その傷が致命傷になったらしい。野原で冷たくなっていたぼんを発見したのも、また祖母だった。

そして、祖母もその後、体を壊し、後を追うように死んでいった。亡くなる直前まで、祖母は猫の島の話をし続けていた。

フェリー乗り場に着く。夜中の海は真っ黒で、深さがわからない。白い月影がゆらゆらと、海面に漂っている。顔に刺さる海風の冷たさに縮みあがりつつ、目を凝らしてじっと待つ。すると、海

面に浮かぶ白い月影の上を、さっと何かが横切った。

——ほら、来た。

何も見えない波間から、ぬっと何か動いたと思うと、ぴよんと飛び出してきた影。いくつも海から飛び出す影は、陸地に降りると猫に姿を変えた。姿が変わるや否や、町中に散らばっていく。その中で、ひととき大きな影がぼん、と私の横に降り立った。

「ひゃしぱりね」

ぼんだ。死んでしばらく経つというのに、相変わらず私には愛想がない。いや、目を合わせてくれるようにはなったのかな。

ある冬の日、祖母との思い出が詰まった家に帰りたくなくて、真夜中の海岸沿いをぶらぶら歩いていた。海岸沿いの道はひと気もなく、しんとしている。冷えた空気の中、まっすぐに届く灯台の

光がまぶしい。不意に、ぱしゃつと波が跳ねた音がしたので不思議に思っただけで海を見た。すると体に、しゅるつと風がまとわりついた。え、と思った瞬間、足元に、ぼんが、いた。驚いて立ち尽くしている、ぼんはつまらなそうな顔で私の足に首をこすりつけると、さっと海に帰って行った。思わず堤防に駆け寄る。すると、ぼんの尻尾が波間に隠れていくのが見えた。

——それから一年に一度だけ、ぼんは私の元に現れる。

ぼんに視線をあわせてしゃがみ込む。ぼんは動かないで、じつとこちらを見つめていた。

「ぼん、あのね。私結婚するの」

金色の目が、きらきらと光っている。

「それでね、ここを離れるの。今まで、ばあちゃん約束守ってくれてありがとう」

最後くらい、いいかな。私はゆつくりと、ぼん



の頭に手をおいた。けして手触りがいいとは言えないザラザラした触感が懐かしい。

「そっちで元気でね」

ぼんはおとなしく撫でられていたと思うと、ぼつと私の手を振り払い噛みついた。子供の時のように歯を立てるのではなく、甘噛みだった。そして最後に一度だけ、にゃあと鳴いて、ぷいっと向きをかえた。

ぼんは、黒い影に姿を変えたと思うと、するりと海に消えていった。 ㊦



青葉時雨の降るころに

青葉時雨の降るころに

百武彩花

絵…平川耀子

尾道大学を囲む水源池。そのダムの近くに建っている天之水分神社には、一風変わった奴が住んでいる。出会った頃から、何者なのか聞いているのだが、はぐらかされるばかりだ。わかっているのは、彼は人間ではないということ。彼は相手によっているんな姿に変身するようで、女の子だったり綺麗な女性だったり、おじいさんや青年だったりするそうだ。「やっぱり出会

うなら素敵な相手にしてあげなきやね」とおかしそうに言っていた。そして先ほどから、私が彼を彼と呼んでいる通り。今は、大学生くらいの男の見た目をして現れている。

どこにでもいそうな人の姿だけれど、やっぱり彼なりのサービスなのか。――顔は結構好みなタイプだ。

季節はもう晩夏へと入ったはずなのに、眩しいほどの陽光と暑さは減る兆しはない。

瀬川葵は、まとわりつく夏の暑さを小さな木陰とすぐそばで聞こえる噴水の音で紛らわしながら、彼が話すのを聞いていた。

「昨日は、眼鏡でちよつともつさりした男が来たよ。課題の題材にするつもりでここに来たみたいだ」

「へえ、水源地を題材に？ それで、あんたほんんな格好で出ていったの？」

「出ていかなかったよ。あんまりに真剣なもので、面白みに欠けた」

心底うんざりした顔で溜息を吐く。

「なあにそれ」

「安売りはしない主義なんだ。興味を引かれない奴には会わない」

「ふうん」

これは、私には興味を持ってくれた……とうぬ

ぼれてもいいのだろうか。葵は自然と上がってくる口角を隠すために、慌てて今日のおやつのがりがりをくわえた。

「それに今年いっぱいはこの若者姿しかできないからね。女の子と仲良くしたいさ」

おどけたように肩をすくめて、彼はじゃがりこを二本まとめて口に入れる。

「えー？ そうだったの？」

「そうなんだよ。そんなコロコロ変えられないの！ 今年は葵以外には話しかけてないな……」

「あー、この時期女子は外に出ないからねえ」

友達にも日焼け止めを塗らたくってガードしている子もいる。確かに私のように外でご飯を食べているのは少数派だろう。

「葵は？」

「小さいころにさんざん焼けてたからね。今更って感じ」

葵は小さく肩をすくめて、じゃがりこをもう一

本つまみ、端から齧^{かじ}った。

「でも葵って、肌きれいだよな」

不意打ちで下から覗き込んできた彼と目が合っ
て、思わずベンチから落ちそうになる。それか
ら、かけられた言葉を理解して頬が尋常じゃない
スピードで熱くなった。

「な、なに、や別に、これは化粧してるし、ほら」
しどろもどろになった葵はわけもわからず捲し
立てる。

「一応！ SPFの高い日焼け止めとカラーファ
ンデくらいはしてて、それにちよつとチーク足し
たくらいのナチュメっていうか！ ほら、夏だし
崩れるのも嫌だし。でも！ その——ありがと」

途中まで気圧されてキョトンとしていた彼の顔
が、最後の葵の一言で緩んだ。

「全然言ってる意味がわからなかったけど、とり
あえず葵が努力してるのはわかった」

「……いや、別に努力なんて」

ベンチでお菓子を食べようとしていた葵は、何
とも安いナンパの言葉に、がつつり眉間にしわを
寄せたまま振り向いてしまった。思わず口からで
た言葉は「はあ？」というメンチ切った一言だ。
女子としてどうなんだ。

それからというものが妙に懐かれてしまい、週一
のペースで会っている。

「なあ葵。知ってるか、俺が神様説と妖怪説二つ
あること」

「なにそれ」

「俺が、この水分神社の神様説と水源池の妖怪説
と。あるらしいぜ」

葵は小さく首をひねる。

「あんた、私以外と会ってないんじゃないか
の？」

「直接話しかけたりはしてないってだけ。俺だっ
て四六時中ここにいるわけじゃないし、散歩くら
いするよ。たまに木の上から目が合っって驚かせ

「ありがとな」

これはわざわざここに来ていることがバレてい
る。動揺のあまり、余計なことを言ってしまった
のとバレてしまっている気恥ずかしさで顔が自然
と下を向いた。

畜生この天然タラシめ！

葵は手を伸ばして取ったじゃがりこを音高く噛
み砕いた。

二人は神社の敷地内に申し訳程度においてあ
る、一台の丸太型ベンチをお互いにまたいで最近
あったことを話している。人間と得体のしれない
奴との異文化交流は今年の初夏に始まっていて、
毎週水曜の昼休憩に会うのがお約束になっている
のだ。

きっかけは信じられないことにナンパだ。

「お嬢さん、そのかわいい袋のお菓子。一口くれ
ない？」



ちゃったりもするんだよな」

彼の話を聞きつつ、葵が引っかかったのはちよつと別の部分だ。

散歩って——ああ、こいつ、

「神社の外でも生息はできるのね」

葵の何気ない呟きに彼は嫌そうな顔をした。

「生息っておまえ……生息はないだろ」

「しょうがないじゃない、どういえばいいのよ。

ここ以外じゃ見たことなかったんだもの」

正直なところ、本当にこの彼の正体はわからない。

名前も知らない。本当の姿も知らない。唯一

知っていることといえば、この神社に来ればいる

ということだけなのだ。

「神社にいないときは池に潜ってるもんだとばかり……」

「ん、あながち間違つてはないな。暑い時は潜つ

てる」

「やっぱり？ たまに生臭いときあるもんねー」

彼は慌てて服の匂いを嗅いだ。

「は!? 嘘だろ、そこ一番気を使つてんだけど!」

「嘘よ」

目に見えて安堵する姿に、思わず笑いもれる。

正体不明のくせに匂いには気を使うのか。

「何だよ、焦つただろ」

「ごめんごめん」

ベンチの上に身体を伏せて大笑いしていると、

あきれた様に頭を叩かれた。

「そんなに笑うなよ……。そいえば、こないだ偶

然人に見られててさ『身投げか!?』って思ったん

だろうな。慌てて水源池を覗いてんの。だから俺

が水面ぎりぎり顔アップにしてやってさ!」

「うわ、性格わる!」

「そいつめっちゃ驚いて! 涙目で走つてったんだぜ!」

「しりこだまは抜かなかつたの? 河童の習性で

しょ?」

言い返した言葉に、男が「ふうん」と意味ありげにうなづく。そうなれば、食いつくのは葵の方だ。

「え、何。本当に河童? ついに教えてくれる気

になつたの?」

「そりゃあ、初夏の頃から何度も何度も聞いて来

られたら流石に教えるかつてなるだろ」

「よくまあ、答えるのに夏まるまるつと引つ張つ

たよね」

「まあ、そろそろ頃合いかなつて」

「ほんと……?」

「でも今日はもうだめかな。そろそろ時間だろ」

促されて時計を見てみる。午後の授業開始ま

で、十五分。

喉元まで出かかった悲鳴を慌てて飲み込んだ。

「じゃあ、また来週ねッ!」

葵はベンチの上に置いていたお菓子をコンビニ

の袋に詰め込み、慌てて支度をする。またいでい

たベンチから立ち上がる時に、盛大に脚をぶつけたのはご愛嬌だ。

神社の敷地を出たところで、またね!と言おう

として振り返る。彼はベンチから消え失せ、そこ

には静かな元の水分神社があるだけだった。

*

葵と初めて会ったのは、青葉の水分さえも奪つ

てしまうような真夏日だった。

連日続く猛暑とうんざりするほどの日照りに、

慌てて降雨の準備をしていた頃だ。

そんな時に、葵は小さく鼻をすすりながら天之

水分神社にやってきた。興味本位で見守ることに

してみると、神社のベンチに座るなり開口一番

「くそつたれ」ときた。

しかも、鼻水をジュビジュビさせているものだ

から、思わず笑ってしまった。



お前、女子としてどうなんだ。それ。

二度目に会った葵は口元に淡く笑みを浮かべていた。

何が楽しいのか、右手に猫じゃらしを持ってベンチに座って身体を揺らす。気持ちよさそうに、幸福そうに。時折空を見上げては、視界に入る新緑の鮮やかさに一層顔をほころばせていた。

三度目は眉間に皺を寄せて、手元の数枚の用紙を見ていた。

上から覗き込んで見ると紙面上には赤の書き込みがあふれている。

元の文字が見えなくなるくらい書き殴^{なぐ}つてある赤文字は、痛々しいほどに力が込めて書かれてあった。あとでそれとなく聞けば、授業でさんざんに指摘を受けた発表資料だったらしい。

それを力いっぱい握って、最後の方の紙なんてぐしゃぐしゃになっていて所々破れている。全身

で現される悔しさと、悲しみと苛立ち。ポロポロと溢れる涙を乱暴に拭いて、カバンから取り出したお菓子をむさぼる。

その姿がどうにも、どうにも可愛らしくて。思わず零^{こぼ}れた笑みを隠しめせず、姿を顕わしてしまっただ。

「お嬢さん、そのかわいい袋のお菓子。一口くれない？」

背後からかけた声に振り向いた彼女は、思いっきり顔を歪^{ゆが}ませて「はあ？」なんて言う。

あの時の事を思い出すと自然と頬が緩んでしまう。

「葵は本当に面白いなあ」

慌ただしく大学に走っていく姿を空から見ながら、人差し指ですつと弧を描く。ちよつとでも彼女が速く走れるように、追い風のオプシオンを。

これくらい力ならまだ使えるのに、と溜息すら出てしまう。

「あ、もう金木犀の匂いがする。今年は随分と早
いんだな……」

風に乗ってきた夏の終わりの匂いは、もう無視
できないほど濃くなっていた。

一週間後、葵が神社の敷地に入ろうとすると彼
はとつくにベンチに座って待っていた。

彼の正体が判明するということが葵を緊張させ
ている。思わずぎこちない会話の入りになっ
てしまっている。もうのはご愛嬌としてほしい。

「お、おーい、イケメンさん」

「おいおい、やめてくれよ今更だろ。そんなの皆
知ってることだ」

前言撤回。一気に葵の力が抜けていった。

「正体を教えてやる、とか言われたから。なんか
漫画みたいにエフェクトとか掛かって、『これが
俺の真の姿だ』とか言って出てくるのかと思っ
た」

「うわ、そんなくそだせえことしないから」

「くそだせえとか言うな！」

わざと噛みつけば、調子に乗ってさらに言葉を
重ねる。

「やーい！ くそださ女ー！」

「傷つくやめろ！」

「やーい！」

「子供か、おのれは！」

ここまで会話が弾んでしまえば、もういつもの
間合いだ。葵は安心したように、ベンチへと足を
進める。

——あれから一週間。いきなり正体を教える、
とか言い出されて、戸惑ったのは葵の方だ。食
ついたり見せたりしたが、本音は知りたくな
かった。

「あのさ」

「待って、葵。先に俺の話を聞いてくれる？」

それでも葵は、男の言葉を無視して口を開く。

「別に、教えてくれなくていいよ」

かすれて吐息混じりになった葵の言葉を聞か
なかったふりをして、彼は話し始める。

——そんなの、反則だ。

「俺、実は水分神なんだけど」

「……聞きたくない」

ふいつと顔を背ければ、隣から困ったように苦
笑が返ってくる。

「夏が過ぎれば、俺はここにいられないんだ。暑
さが厳しい夏の間だけここにいて、水源を守るの
が本来の役目だからな」

「聞いてない。そんなことまで教えてくれるっ
て、私聞いてない」

もうメイクなんてお構いなしに、手の平で思
いつき顔を隠す。

「俺もお前と別れるのは惜しいんだけど、もう力
が出ないんだよな」

ほら。この手のお話のエンディングは、正体を

知ってしまったえば最後、もう一緒にいることは叶
わない。古典作品から受け継がれている王道パター
ン。

知ってた。分かってたのに。

「……どこまでお約束を貫くのよ」

「いつそ物語みたいになればよかった。最後に力
を振り絞って葵にプレゼントとかね」

両手を広げながら、おどけて見せる姿に思わず
腹が立った。

「うるさい、馬鹿！」

本当に別れを告げられているようで、葵は一層
顔を背ける。それを見て男は、情けなく笑った。

「泣くなよ」

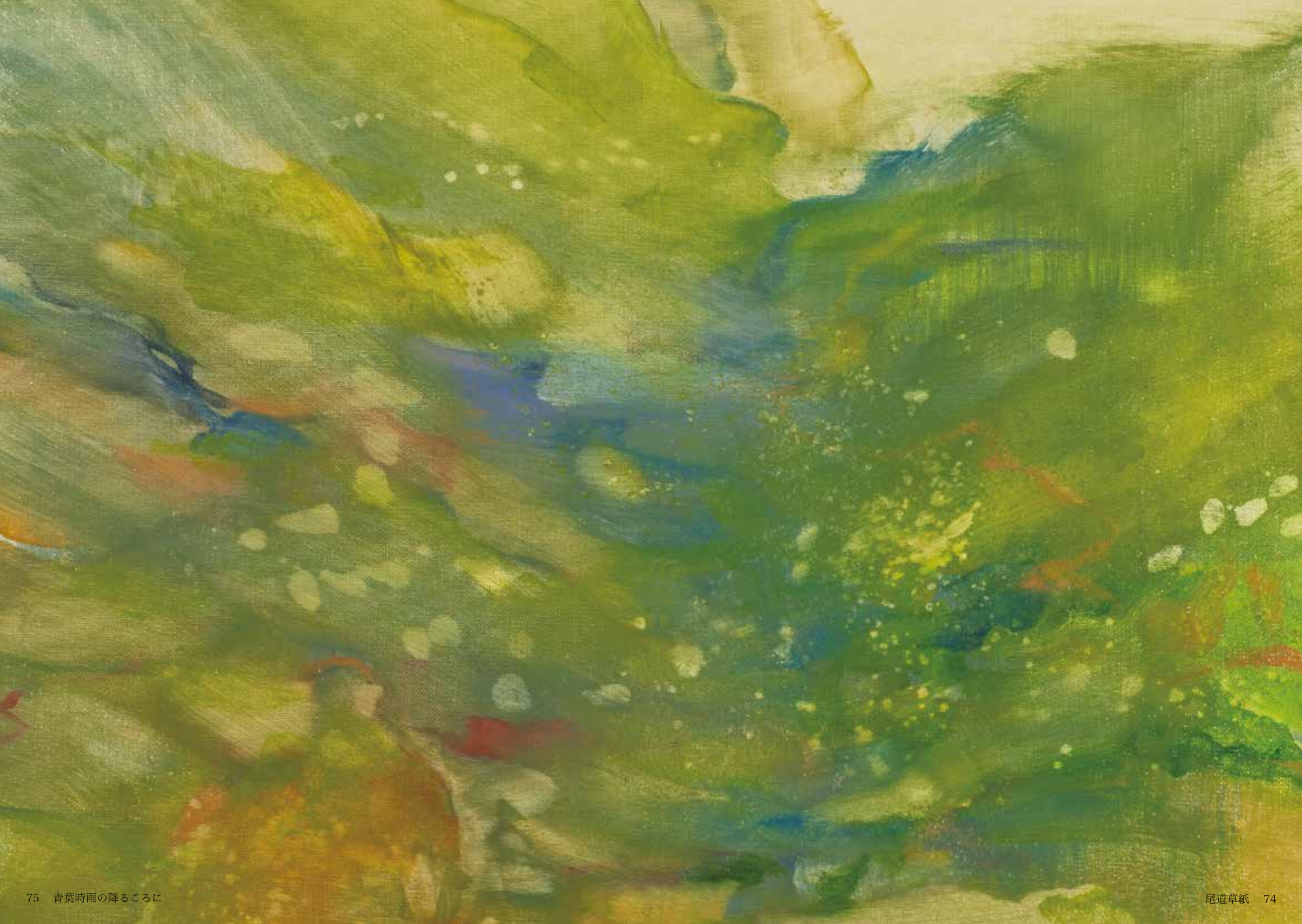
「泣いてないわよ……！」

「くそつたれくらい言ってくれよ。調子狂うから」

「……くそつたれ」

葵の情けない声が小さな境内に響く。

男はゆっくりと葵の頬を両手で挟み、掬い上げ



た。

「雲となり」

「……ええ？」

「雲となり雨となりても身に添^そわば　むなしき空を形見とや見む」

一音、一音ゆつくりと詠むと、彼は微笑んだ。

「新勅撰和歌集。得意だろ？　日本文学科さん」

じゃあ、と彼が彼女の頬をひと撫ですると。瞬きの間にまるで陽炎のように消えてしまうのを見て、彼との夏は幻だったのではないかと思う。

「くもとなり　あめとなりて——」

でもまだ彼が残した和歌が耳に残っている。

きつと彼からの大切なメッセージだ。

葵は、彼に触れられた頬をゆつくりとなぞると、いきおいよく立ち上がる。

悲しみに暮れている暇はない。まずは、忘れないうちに和歌を解かなければと、葵は大学へと駆けていった。

——ねえ。天之水分神社には一風変わった神様がいてくれる。これは信じていて欲しい。本当のことだから。

私が恋をした優しく、カッコいい神様がいて、いつでも見守ってくれているのだ。

雲となり雨となりても身に添^そわば
むなしき空を形見とや見む

「私は朝には雲、夕べには雨になってあなたに寄り添う。あなたと離れたあとも、何も無い空を見るだけであなたは私のことを思い出してくれるだろうか」[■]

執筆後記

さくら



篠原彩

千光寺公園が桜の名所かつ恋人の聖地であるというところから着想を得て書きました。フェンスに掛けられた錠前のふんだけ恋の形があるってとても素敵なことだと思います。本作はそんなたくさんの恋のうちの一つです。展望台の老朽化のため山頂エリア一帯のリニューアルが決まっているそうですが、新しくなっても恋人たちが幸せを願うことができるような場所であってほしいと思います。最後にになりましたが、尾道草紙の制作にかかわって下さった全ての方々、手に取って下さった皆様、本当にありがとうございました。

絵・田中智美

「恋人の聖地」と知って改めて千光寺山に行ってみると、なんとまあカッパルの多いこと。猫のモニュメントのバックは尾道水道と桜がバランスよく見えるようになっていたみたいです。桜が咲く頃またここで、たくさんの人々の物語が紡がれていくのでしょうか。素敵なお作品に華を添えられたら幸いです。

井戸の中の猫



鈴木菜月

夢だった尾道草紙に作品が載ることになり、とても嬉しいです。最初は少し奇妙で不気味な話にしようと思っていたのですが、いつのまにかほんわかストーリーになっていました。可愛らしい猫の姿が頭に浮かぶような作品になっていれぱと思います。尾道草紙制作に関わった方々、そして手に取って下さった皆様、ありがとうございました。

絵・指田葉月

尾道草紙に参加することができとても嬉しく思います。尾道は時間が止まったような独特の空気が流れていますね。尾道の坂を歩くと不思議な世界に迷い込みそうで、この「井戸の中の猫」の世界もあるかもしれないと感じます。イケメンなキジトラさんに出会ったら、ついて行き猫の楽園で猫たちと戯れて、猫又様にギョッとしたいものです。

祭りの日の思い出



立坂鞠奈

苦しいことがあっても、前を向いていける話をとって書きました。楽しんでもらえれば幸いです。初めて福石猫に会ったとき「三億円欲しい」と願ったはずですが「そんなたいそうなことはできんよ。働け」と一蹴されたのでしょうか。未だに手に入っていません。ささやかなご縁くらいはきつと結んでくれるので、彼らに会いたい方は猫の細道を訪れてみてください。個性豊かな可愛い顔ばかりできっと自分のお気に入りが見つかります。最後に、尾道草紙制作に関わって下さった方々、手に取って下さった皆様、本当にありがとうございました。

絵・大仁田桃

立坂さんの作品を初めて読んだとき、祭りのあの独特の夜の雰囲気と主人公の複雑な心境とが混ざった何とも言えない心地よい奇妙さを感じました。その不思議な情景をイラストでも感じていただければ幸いです。憧れだった尾道草紙に参加できましたこと、素敵なお作品と出会えたことをここでお礼申し上げます。

長神社の狛犬



卜部 文瑳綺

尾道の長神社にある狛犬には首がありません。その理由は誰も知りませんが、おそらくは火災によって劣化が進み、首が取れてしまったのだらうとのこと。初めてこの狛犬を見た時から、この狛犬の物語を書こうと心に決めていました。こうした小さな物語の種が散らばっていることが、尾道の大きな魅力だと思います。

最後に、お忙しい中本作に挿画をつけてくださった矢内さん、また編集の皆様は深く御礼を申し上げます。ありがとうございました。

絵・矢内 早由紀

狛犬のたくまじさと神々しさを感じたのでそれを伝えたいと思いましたが制作しました。実際のモチーフとなった狛犬には首がなくイメージで描きましたが、彼の人々を守りたいという意志の強さが伝われば幸いです。素晴らしい作品に出会える機会をいただきありがとうございました。

帆雨亭へようこそ。



田口 悠

私自身が初めて帆雨亭へ行ったとき、窓からの景色に本当に感動しました。そして、(時間が止まっているみたい)という、一番初めに抱いた感想から、今回のお話を考えました。「時間がゆっくり流れる」ということをどうやって表現しようかとても悩みました。帆雨亭の素敵なお店の雰囲気も少しも伝えられていたら幸いです。

高校生の頃から憧れていた尾道草紙に参加することができて本当に嬉しかったです。今回お世話になったすべての方々、帆雨亭を紹介してくれたアルバイト先の店長にも、心より感謝申し上げます。

絵・吉田 奈央

今回「帆雨亭へようこそ。」を読ませて頂いて。

この物語に流れる「時間」の存在を強く感じ、挿絵を描くにあたっては、そのシーンごとの「時間」をどう表すかを意識しました。一人では出来ない経験が出来て楽しかったです。

私の挿絵が、田口さんの作品の一助となれば幸いです。

ある夜のお話



難波 日向子

大学から出る最終バスに乗った時は、乗り換えの時間が十分あります。その時に、電車の時間まで海岸沿いのベンチから海を見てぼんやりするのが好きです。冷たい海風の中、向島の灯台を見ていると、灯台の光が大きな猫の目に見えたのがこの話を思いついたきっかけでした。

海、港、猫、と私が好きな尾道について書く事ができ、とても楽しかったです。この本を手にとって下さった方に、少しでも魅力が伝わればいいなと思っています。

最後に、今回挿絵を描いて下さった鷺尾さん、制作に関わり支えて下さった皆様、本当にありがとうございます。

絵・鷺尾 英玲奈

自分の大好きな町である尾道を舞台にしたお話に挿絵をつけることができ、とても光栄でした。このお話を読んだ時に感じた暖かく少し切ない空気を大切に描きました。読んだ人が少しでも暖かい気持ちになつてもらえれば幸いです。

青葉時雨の降るころに



百武 彩花

大学に来る前から参加したいと思っていた尾道草紙に携われてうれしいです。みくまり、という音が気に入って舞台にしてみました。こんなイケメン現れないかなあーいなあ。

今回、絵を描いて下さった平川さん、制作に関わりたくさん協力をしていただいた皆様に感謝を申し上げます。

絵・平川 耀子

挿絵を担当するにあたり、「青葉時雨の降るころに」を何度も読み返し、沢山の景色を想像しました。物語は、湿った夏の暑さを感じさせながら、爽やかな風と木漏れ日が舞っているようでした。素敵な物語が詰まった『尾道草紙』に関わることができて、とても光栄に思います。ありがとうございます。

創作民話マップ



尾道市立大学

「青葉時雨の降るころに」
久山田水源地・天之本分神社 ●



山陽新幹線

「さくら」
千光寺公園 ●

ONOMICHI

「祭りの日の思い出」
猫の稲道 ●



「帆雨亭によろこぶ」
上茶・帆雨亭 ●



「長神社の狛犬」
長江口・長神社 ●



山陽本線

尾道草紙 12

創作民話マップ

マップ絵作成 = 尾島雛子

「井戸の中の猫」
持光寺前・二階井戸 ●



「ある夜のお話」
尾道渡船フェリー乗り場 ●



尾道駅

挿画がつなぐ学部への架け橋

美術学科 教授
野崎 眞澄

毎年、尾道が桜色に染まるこの時期にあわせて、新しい尾道草紙を皆様にお届けできることを大変嬉しく思います。

昨年まではデザインコースの学生を中心に挿画をお願いしてきましたが、今年は広く美術学科全体から希望者を募ることにしました。内訳は油画から二名、日本画から三名、デザインから二名です。ページをめくった印象が少し変わって、新鮮な読後感を感じていただけたいのですが。絵画系の学生にとっては、編集作業上の細かいスケジュール調整など、制約が多々ある中での絵作りということ、いろいろ苦労があったことでしょう。普段の課題制作とは、描くモチーフも画材も違うので難しかったとは思いますが、これもいい経験になったのではないのでしょうか。

これからも美術学科そして芸術文化学部全体として尾道草紙の編集に関わりながら、地域を代表する文芸誌として皆様に楽しんでもらえる紙面作りを目指していきたいと思えます。今後も応援をよろしくお願いいたします。

尾道草紙、その顔。

美術学科 教授
世永 逸彦

今年も『尾道草紙』の誌面づくりの季節が巡って来ました。私の研究室では、表紙と誌面の構成デザインを担当させていただいています。今年も、装画に二年生・サンガトウ（山川桃さん）、装丁に三年生・大山由貴さんの二人を据えて、コラボレーションのカタチで進めてゆきました。サンガトウさんの個性豊かなモノクロの線と独自の世界観、大山さんの簡潔でシンプルな題字と余白を活かしたデザイン。今年の日本文学科・光原ゼミ七名による作品群は、軽快で、カラフルな印象でしたが、装丁チーム二人が表紙を通じて映し出した『尾道草紙』の印象はいかがだったのでしょうか？ また、『尾道草紙10周年記念BOX』も同時期に発売されて、こちらでは、尾道の千光寺上空の夜空に、空想の翼を広げて、この町の中を自由に飛び回っている文学好きの若者たちの視点で、尾道の景色がビジュアライズされています。こちらの装画は三年生野見采香さんが素敵な絵を飾ってくれました。

『尾道草紙』はおかげさまで創刊から十年を越えました。皆様のご愛読に心から感謝いたします。このたび十周年を記念して、ささやかな企画制作を行いました。

別冊尾道草紙

尾道ベツチャー祭り二百年記念号

2007年、尾道を代表するお祭りの一つ、ベツチャー祭りの二百年を記念し、『尾道草紙』の別冊をベツチャー祭り特集として制作しました。通常の尾道草紙とは違って、過去のベツチャー祭りの模様を撮影した写真と物語を組み合わせた本になっています。懐かしいベツチャー祭りの映像が大変に好評で、品切れとなって久しかったので、

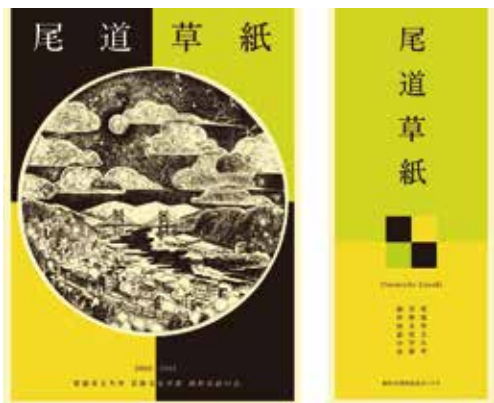
一宮神社のベツチャー祭り／田村禎英
帰省／光原百合
面の精たち／松尾るりえ
神輿の宙廻し／田村禎英
帰郷／光原百合

表紙写真／土本壽美

今回の機会に増刷しました。写真を提供してくださった故・土本壽美さんと一宮神社の皆様にご篤く御礼申し上げます。

尾道草紙 BOX 制作

十周年記念ですので、十年間に制作した尾道草紙すべてを納められるBOXを制作しました。尾道草紙創刊号から10号までと、別冊1冊を含めた11冊を納められるBOXとして、美術学科野見采香さんによる尾道の風景のイラストをあしらっています。尾道草紙の中に入れたセット販売と、小物入れやインテリアとして使っていただけるようBOXのみの販売も行います。



尾道草紙10周年記念ボックス



別冊尾道草紙
尾道ベツチャー祭り
二百年記念号

尾道草紙バックナンバー

二〇〇五〜二〇一六

尾道草紙 1 創刊号

ことほぎのしろ／安部星子
神輿／澤村晋作
港の双子／天木俊
ポンボン岩と千の光／石田めぐみ
夏の終わりの幻想／菅亜未
雁木の夢／光原百合

表紙絵／新枝友里



尾道草紙 2

浜土手／市川敬太
盆通い／新屋法安
青い空／こはらさち
猫主様／三浦幸子
約束一つ／前田美穂
かくれん坊／水戸川奈緒
西国寺山の天狗／三木慶美
お稲荷さん／藤井優希
花吹雪／光原百合

表紙絵／高田知枝



別冊 尾道草紙

『尾道ヘッチャー祭り』

一宮神社のベッチャー祭り／田村禎英
帰省／光原百合
面の精たち／松尾るりえ
神輿の宙廻し／田村禎英
帰郷／光原百合

表紙写真／土本壽美



尾道草紙 3

仁王様と橋／岡村めぐ美
でべらおに／永田悠史
三つ首様と桜の木／宮本真里
阿犬吠犬／倉垣裕太
だごんさま／徳田翼
猫の花嫁／真野美樹
ええもんの竜／大場賀輝
オオクスノキサマ／松尾るりえ
福と石と猫と／黒田直樹
松になったとんび／横山奈津紀
尾道に住むふたりの神様の話／柴智寿恵
よいのなごりを／吉山結

表紙絵／中屋萌梨



尾道草紙 4

音の鳴る道／南優香
潮騒に誘われて／黒田直樹
今宵に白く／松田佐穂
語り夜／上田恵里奈
八幡参道／森元瑠衣
追いかけて鬼／衛藤清美
水売りと井戸／原田佳美
小さな狛犬／見分小百合
かんざし未練／中根香織
だんだんおはぎ／鎌倉勇弥

表紙絵／岡本晴夏



尾道草紙 5

ひるねでらのあまのじゃく／藤原遥香
桜色、春衣／藤田絢香
飴の音／塩田恵美
つらなり灯り／森田彩樹
おはあちゃんとみちの空／長友美聡
玉の浦物語／鎌倉勇弥
花房さん／山本理紗
なごりとなりて／栢木希望

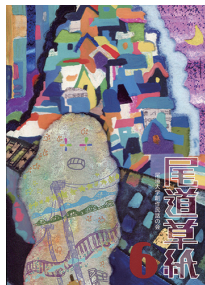
表紙絵／山室芳恵



尾道草紙 6

まいごみち／川端彩佳
河童とり綱／菊池麻衣子
八坂の狛犬／千葉菜美
逃げていく赤／佐藤麻衣
満天童子／中根香織
釣り人／橋原彩
狛犬と蹴球／武田真由子
夜桜招待券／鎌倉勇弥

表紙絵／中島有加



尾道草紙 7

ようおまいりのお地藏さん／大内雅代
桜井戸／山下美由紀
水猫／宮崎綾
玉の岩の話／張明珠
ある日の夕景／奥山春菜
灯火／藤尾史香
思い出まいご／新井志野

表紙絵／斎藤洋美



尾道草紙 8

青い鱗／竹内しおり
鳴龍天井／大川はるか
和菓子日和／片野望未
天邪鬼の悪戯／近藤一樹
ロープウェイおじさん／井上実優
ふたりおみこし／森岡ひかり
ほんぼり星／山根未来
神在の道／國貞絢子

表紙絵／喜來詩織



尾道草紙 9

雨音とてるてる坊主／川口俊平
あんないにん／志々田愛加
釣瓶落とし／香川莉歩子
不思議なバス／日名子紗綾
藍の手／竹口碧人
ふたりのひかり／玉冲望未
小さな願い事／山下紗季
ムーンライト・ピバップ／植村菜月

表紙絵／白石緑



尾道草紙 10

前田池のお地藏様／松浦明日香
あおい春、あかい夏／荻野奈々
水があふれます／高橋美佳
金魚の綿菓子／宇山祐那
最後の上映会／近藤那美
空鉦太鼓／荒谷茜
こいの龍王さま／野中翔
さかしまの海／久保瑠璃
くれのあい／尾形祥子
ゆき子のみち／小林彩香

表紙絵／吉田美結



尾道草紙 11

福石猫のいる町で／岡本明香里
神鎮小路のその先で／荒川遥
松と岩／未政百合絵
願いの町／小池夏美
弥生尽の約束／光原百合
神さまのいと／井田隆代
まぼろしのさかな／田端敏之

表紙絵／奥村彩



編集後記

大山 由貴

美術学科編集

素敵なお話と挿絵を繋ぐ仕事ができとても嬉しく思います。尾道草紙に関わることで今後も本に携わる仕事がしたいと強く思うようになりました。本書を制作するにあたってお世話になった方々、手に取ってくださった皆様に感謝申し上げます。ありがとうございます。

谷上裕貴

美術学科編集

尾道草紙の編集に携わり、多くの方が関わっていることを知りました。関わらないと感じられないことだったと思うので経験することができて良かったです。ありがとうございます。そして、この本を手にとってくくださった皆さんに楽しんでもらえたら嬉しいです。

奥村菜々実

美術学科編集

初めて編集という作業に触れました。たくさんの人と関わりながら、一冊の形が出来上がってゆくのは不思議な心地で、完成を想像して作業するのはとても楽しかったです。そして、その中で多くの方に助けてもらいました。本当にありがとうございます。

サンガトウ

表紙絵

様々な文体・雰囲気を持つ物語が集まる尾道草紙の表紙なので、多種多様なモチーフの形を混ぜ込んで濃密に埋めました。植物や尻尾、海に風です。読後に本を閉じた時、物語たちの余韻を線に絡めていただけたら幸いです。

田口悠

日本文学科編集

私自身至らない点も多かったとは思いますが、編集のお手伝いをさせてただいてとてもいい経験になりました。ありがとうございます。少しでも多くの方に、尾道草紙が届きますように。

監修 光原百合 尾道市立大学 芸術文化学部 日本文学科 教授
野崎真澄 尾道市立大学 芸術文化学部 美術学科 教授
世永逸彦 尾道市立大学 芸術文化学部 美術学科 教授

発行 尾道市立大学 創作民話の会
〒722-8506 広島県尾道市久山田 1600 番地 2
電話 0848-22-8311 (代表)

発行日 平成 29 年 3 月 31 日
印刷 株式会社 村上オフセット印刷